

ドイツ中世のイタリア系教育詩人 Thomasin の学識

尾 野 照 治

ドイツ中世を、Tristan や Parzival のような文芸作品に光を当てて研究しようとする場合、ややもすると文芸の情感に流されて、その底流をなす詩人の理性的な学識を見失いがちになる。そのような危険を防いで、研究者の目を覚醒させてくれる作品がある。Thomasin von Zerklære の Der Wälsche Gast『異国の客』がそれである¹⁾。全体は 14,750 行余から成っており、それが 10 の buoch『書』に分けられている。『第一の書』は、主に外向きの宮廷作法・宮廷的態度を扱う。その模範として、古今東西の宮廷ロマンの主人公を取り上げている：Andromache や Ênit から始め、Kâlogriant や Parzivâl に至るまで。『第二の書』では、stæte（心変わりしない誠実さ）と unstæte（移り気な不誠実さ）の一般的なテーマを扱う。自然界一般は stæte に支配されているが、人間だけは例外で、unstæte と untriuwe（不忠実）にも支配されている。それゆえ人間界の政治は大きく乱れていると説く。『第三の書』では、この世の「6 つのもの」における unstæte について述べる：richtuom（富）、hêrschaft（支配）、maht（権力）、name（名声）、adel（高貴さ）、gelust（欲求）の 6 つである。『第 4 の書』では、前の『書』を発展させて、再び stæte を取り上げ詳述する²⁾。『第五の書』では、人が天国へ迎えられるために、tugende（徳操）がどのように役立つかを説明する。この道德の教えによれば、現世を支配しているものは 5 種に区分される。2 種は善で、got（神）と tugende であり、これに対立するものは 2 種の悪で、tiufel（悪魔）と untugende（悪徳）である。五番目のものは、それら両者の中間体と言う

べきもので、『第三の書』で論じられた「6つのもの」を言う。『第六の書』は、tugende を認識させることに主眼を置く。『第一の書』から『第六の書』までに述べた内容をすべてふまえて、それを総括しながら論を更に展開していくのが『第七の書』である。そこでは「魂と肉体について」の主要テーマに応じて、その認識手段としての学理 (Psychologie) を披瀝する。最初に挙げられるのが、Imaginâtiô (想像力)、Memorjâ (記憶力)、Râtiô (理性)、Intellectus (知性) の4種。認識方法として学問 (七自由学芸) がそれに続き、更に Divînitâs (精神についての学、「神学」に近い)、Physicâ (自然についての学、「医学」に近い) へと展開し、最後に Decrête (教会法) Lêgês (国法) に言及する。それらを論ずる際に、5種の Sinne (五官) と10種の Güter (善きもの) を援用する。前者は現代の区分にも通じるもので、gesiht (視覚)、gehørde (聴覚)、wâz (嗅覚)、gerüerde (触覚)、gesmac (味覚) の五官である。後者は、体の内にある5種と、外にある5種に区分される。体の内の5種は、sterk (強さ)、snelle (俊敏さ)、gelust (欲求)、schoene (美しさ)、behendekeit (巧みさ) であり、体の外の5種は、adel (高貴さ)、maht (権力)、ríchtuom (富)、name (名声)、hêrschaft (支配) とされる。『第三の書』で挙げられた「6つのもの」のうちの5つが、ここに割り振られる³⁾。上に挙げたすべてのものを論述の材料にして、13世紀前半の Thomasin に備わる学識が、『第七の書』で披露される。しかし、『第七の書』における用語と論述の方法には、現代の我々にとって理解が難しく、馴染めないところが少なくない。詩人の学識は、『第一の書』から『第十の書』に至るまで、全体の深い底流となっているのであるが、それはとりわけこの『第七の書』に具体化されており、どの書におけるよりも学識が熱をおびて語られている。それゆえ特別に『第七の書』を取り上げ、Thomasin の学識を論ずるのは、大きな意義があると言ってよい。韻文作品の性質上、詩人が敢えて端折ったと思われる箇所、あまり重要とは思われない内容の表現が繰

り返される箇所、さらに詩人特有の表現が冗長過ぎて焦点が不鮮明になりがちな箇所などが、全体に少なからず見受けられる。従ってこの論考では、著者 Thomasin の思想の展開を作品に忠実に追っていく際に、原文からできる限り離れないように努めながらも、その内容を理解しやすくするために、あるいは少しばかり換骨奪胎し、あるいは内容を敷衍して、中世高地ドイツ語を理解しやすい日本語にしながら解説を試みる。『第七の書』は、8つの節に分けられている。

I.

詩人はこれまで、人が若いときも年をとったときも、それをなぜ徳操で飾るべきかということに心血を注いだ。つまり、人は徳操を身に備えるために、どのような悲しみや苦しみを受け入れるべきであるか、そしてそれが私達にどのように役立つかということに。それに関連して、「魂と肉体」のテーマについて説くのであるが、まずは魂が肉体の中でどのような支配力を振るっているか、そのことから始める。人は誰もが、言うまでもなく魂と肉体から作られており、それゆえ魂と肉体の双方の支配を受ける。徳操は魂の力であるが、強靱さ、俊敏さ、巧みさは肉体の特性である。魂は常に、肉体よりも重要である。賢者ならだれでも、分別の方が強さに勝ると言う。従って分別は常に、俊敏さよりも重要である。分別は、肉体の強さが獲得するよりもずっと多くの善と名誉を、私達のために獲得してくれる。重大なことを成し遂げるために、私たちは肉体の俊敏さで行動するよりも、分別によってもっと素早く行動する。このことから、肉体の力よりも魂の力の方を、さらに重んずるべきであることが分かる。魂の力の方が、大きな支配力をもつ。肉体の強さと俊敏さは、分別によって導かれるべきもの。そうでなければ、強さと俊敏さはなんの意味も持たぬ。

例えば、草原では人間よりも俊敏で強い獣を、人が森の中で見つけるとする。そうすると獣は、もはや自分の身を守ることはできない。人間の分別が、極めて早く網を作り上げるからだ。その網は分別で編まれ、分別の撚り糸で作られているので、その網にかかるものは魂の力によって、人間の支配を受けざるを得ない。空を飛ぶもの、地を這うもの、泳ぐもの、森の中で生活するものは⁴⁾、すべて人間の支配を受ける。肉体の力では、そのような支配をすることはできない。もし人が体力の強さで戦わなければならぬとしたら、人は獅子を自分の思い通りに行動させることはできないであろう。素早く空を飛ぶ鳥を、人間がさっと捕まえることも不可能である。しかし、分別によって行ふならどのようなことも可能なので、分別が与えてくれるものはすべて、私達の眼前にあると言ってよい。つまり生きとし生けるものは、私達の支配下にある。神は私達に、これほど偉大な栄冠を授けてくださったのだ。そのおかげで、肉体の強さと俊敏さが最後までできないことを、分別はわずかな苦しみを経るだけで、見事にやってのける。

肉体が強ければ賞賛を得られると思うのは、愚かなことである。肉体が俊敏であれば有能であると考えするのも、愚かさを示す。もし肉体の強さと俊敏さが、徳操と有能さを授けてくれるとするならば、強靱な牛にも徳操があるということになるし、素早く空を飛ぶカッコーにも、徳操が備わっているということになる。有能さは、分別と判断力によって私達のものになる、ということを経るべきである。人と同じ魂を持っていない動物には、分別が備わることはない。分別も判断力も、魂の力と呼ばれるべきものだ。もし肉体が分別を支配しているとするなら、家畜やカッコーも分別と判断力を持っていることになる。

神は天使に与え給うた分別と判断力で、私達をも称えてくださった。しかし、私達は原罪を負っているがゆえに、天使ほどにはそれを完全に備えていない。不完全ではあるけれども、私達はそれを持っているので、徳操の獲得

にそれを振り向ければ、大きな幸福を得ることができる。それゆえ私達は徳操と良い習慣とを、分別によって求めるべきだ。望めばすぐに徳操ある人になれるように、分別は私達の道を平らに均してくれる。しかし、私達はしばしば分別を名誉に向けるよりも、むしろ不徳や不名誉、吝嗇や利益の方に向ける⁵⁾。そのように危険な時には、神がどのようにして私達を、判断力によって立派な存在にして下さったのかを、しかと考えるべきだ。なにしろ分別の技を駆使できるのは、神、天使、人間の他にはいないのであるから。これはまさしく、神慮の賜物であると言ってよい。

Got machet uns nâch sîner getât,
do er uns gap des sinnes rât:
solt wir danne daz verkêren
ze böesen dingen und zunêren,
daz an uns gotes bilde hât,
sô volgte wir niht wîsem rât.⁶⁾

[神は私達に分別の助言をお与え下さった時、ご自分に似せて私達をお造りになった。それなのに私達が神に似ているものを、悪しきものや恥辱へと墮落させるならば、私たちは神の賢明な助言に従わないことになるであろうに。]

自分の分別を正しいやり方で名誉と利益に振り向きたい人は、分別をもとの神の方へ向けるべきである。これは神の命じるところゆえ、分別を神の方へ振り向けても、当然ながら誰からも非難されることはない。本来なすべきことを行うようにと神は常に望んでおられるが、そのことが分かる程度の分別なら、誰でも持ち合わせているはずである。

II.

良い分別でも悪い分別でも、それを持とうとしさえすれば、どちらの分別でも持つことが可能である。私たちはともすると、悪行と利益を求めてたぐさんの分別をもつ。吝嗇の点でも、財貨を求める場合でも、非常に悪賢い心をもつ。婦人を騙そうとする場合には、身も心も研ぎ澄ます。それなのに、徳操を獲得しようとする場合には、肝心の分別を持とうとしない。人を騙そうとする時には心せいて、ぐずぐずと半日も延ばすことはできない。聖職者も俗人も財貨を求めるあまり、これまでで最も盲目の状態にある。貪欲は、判断力の目を持っていないからだ。この時代に、彼らの恥辱は広く拡大した。聖職者は本来よい手本となり、俗人は彼らを見倣って暮らす。それなのに聖職者が率先して不正を行うので、俗人も彼らの不正に倣っている。聖職者は邪な人々を改心させるために守りの楯をかざし、それによって彼らをしかと守るべきである。他方、立派な騎士達も同様に、良いこと正しいことのために、携える剣を堂々と振りかざすべきだ。騎士たる者は、貧しい見習い騎士や、孤児や、哀れな婦人達のために、自分の財産と命を掛けねばならぬ⁷⁾。ところが今の時代、これがすっかり逆になってしまった。聖職者は利益を得ることに一層強くなろうとして、悪知恵の他に騎士の剣まで利用する有様。他の人から略奪するための悪知恵だけでは足りず、意地汚い心に従って色々な狡猾さと強さを駆使し、財貨獲得の大きな力を得ようと努めている。同様に俗人も、剣の他に帳簿を手にしたなければ、自分自身を立派だとは思えない。貪欲にも読み書きそろばんの技を、利益に結び付けたいからである。もらわねば気が済まない利益を、自分のものとして確実に書き記す。自分の強さが欠けている所に、巧みに技と悪知恵を向ける。騎士道、徳操、正義に全力を尽くすべき騎士が、夜も眠らずに利益のことばかり考えるのは、立派な騎士に全く似つかわしくない振る舞いだ。財貨獲得のために騎士になってい

る人は、むしろ初心な見習い騎士のままでいる方がずっと良い。金の亡者に成り下がった騎士でなければ、利益欲しさに訴訟を起こすはずがない。本来なら宮廷作法にすべての思いを向けなければならない騎士が、無作法に足を組んでただひとり部屋の片隅に腰を掛け、吝嗇婦人に助けられながら多くの悪知恵を思いつく。どのようにしたら、あいつの力を殺ぐことができるだろうか、どのようにしたら、あいつから田畑を奪い取れるだろうか。こうして必殺技と手練手管に思い至ったら、うんと勇気が湧いてくるように思える。

意気揚々とした立派な騎士達が騎士道に勤しんでいる時、くだらぬ騎士が叫ぶ：「裁判長！ 私の言うことにもっと耳を傾けて下さい！ 私達の法は、その男が自分の牛を飼うことを認めています。だが見習いのくせに、と暴行を受けているのです。」その騎士くずれは、大声で訴えるだけ訴えたら、その牛が誰の所有に帰しても全然気にかけぬ。牛の尻尾でももらえたら、十分に勝訴したものと思込む。この騎士くずれは、神が折角良い認識をするようにと与えて下さった分別を、正しいことに向けていない。分別の向け方を誤ると、名誉ある人の立派な振る舞いが、全くその人の役に立たぬ。悪しきことで名誉を得ようとする人は、当然なことに多くの損害を被る。私達はわずかな利益を得ようとして、分別を間違った方向に向けがちである。そうすると、神の国へ迎えられるという宝を、みすみす失うことになる。持っている智慧はきわめてわずかであるのに、それさえ神の方へ向けようとせず、いつも無益なことや悪しきことにそれを向ける。それゆえ私達は、しばしば失敗を余儀なくされる。

すべての分別は神からの賜物であるから、自分の分別を神に委ねる人は、全く賢明な人であるに違いない。例えば魚を獲ること以外何も知らなかった聖ペテロは、心を神に委ねて説教師になった。ペテロのように神の命令を実行することができない人は、自分の分別を神から遠ざける人だ。喜びの悦楽（天国）から、そして分別の泉（神）から離れていけばいくほど、分別は

人のもとに留まることがいっそう少なくなり、ついにその人はすっかり愚か者に成り下がる。それなのに人は悪魔にたぶらかされて、自分を賢いと思い込む。分別を備えていると思い込んでいる人は、利益、吝嗇、財貨に没頭する。このような不毛の願いは、愚かな心から生ずる。愚か者は酔っ払いと同様で、自分が呆けていることに気がつかぬ。神の命令に従わず、世の人々の悪しき助言にわが身を委ねる人は、生まれながらに持っている最善の力を失っている。その人は自分が何をすべきか分かっておらず、悪を善であると思い違いをしている。

人はだれでも、そこに助言を求めるべき4つの力を持っている。老年でも若年でもあらゆる知識と徳操が、その4つの力に従属する。人はこの世でできることを、いつも4つの力に振り向けねばならぬ。その力とは、Imaginâtiô（想像力）、Râtiô（理性）、Memorjâ（記憶力）、Intellectus（知性）のことである。「想像力」は、人がこれまで長い間知らなかったあれこれの事物の性質に、考えを巡らすものである。これと「記憶力」は姉妹の関係にある。「想像力」は「記憶力」に、今日の前にあるものを与え、「記憶力」はそれを確実に維持する。この両者を支配しているのが、「知性」と「理性」の力である。「想像力」は、目にするもの、鼻で嗅ぐもの、手に触れるもの、舌で味わうもの、耳に聞こえるものなどすべてのものを、自分の主人である「理性」と「知性」のもとに、持参しなければならぬ。そうすれば「理性」は、良いものと悪いものに判別して、良いものを「記憶力」の保護に委ねる。「知性」はその時、天使と神への使者になるはずだ。

あまりに激しく利益を得ようとして自分の心を捨てる人は、持てる最善の力を失う。つまり宮廷作法を身につけるようにとの助言や、良いことに勤むようにとの助言を与えてくれる力を失う。「理性」は善と悪を区別することができる。

die verliust swer sinen muot
 an gewinnunge wenden wil.
 er weiz niht wenner hât ze vil,
 er weiz niht, wan er ensol,
 waz stê übel ode wol.
 der Intellectus ist verlorn
 der uns alln ist an geborn,
 wan er wil niht erkennen got,
 leistent sinen willn und sîn gebot.⁸⁾

[自分の心を利益に向けようとする人は、理性の力を失う。彼は財貨を溜め込み過ぎているので、つまり分かるべき人ではないので、何が良く何が悪いのか見分けられない。私達皆が生まれながらに持っている知性の力は、駄目になっている。というのは、彼が自分の意志と命令を行いながらも、神を知ろうとしないからだ。]

そのような人の「想像力」は停止状態にある。どのような獣でも、神を知らないけれども万物の恵みから力を得ている。正しい分別を持たず、利益を求めて自分の心を捨てる人は、もっと大きな財貨を捨てることになる。ところが残念なことに、利益に自分を委ねる人は、十分に分別を持っていると思い込んでいる。最後の審判まで生きたとしても、人がこの世で完全な教えを得ることは決してありえない。それゆえ、この世でどうにか自分のことをやってのけることのできる人は、神の祝福を受けた幸せな人である。知識をすっかり習得できるほど長い年月を生きられる人は、一人もいない。賢者ソクラテスが言うように、人が知り尽くしていることなど何もない。

III.

私達はだれもが賢明であろうとしているのに、しかし愚かにも分別の賞賛を吝嗇に求める。他の人から奪い取る人が、今や賢者であろうとする。もっと大きな（神の）分別を知ろうとするなら、世俗の利益は彼にとって、（天国へ迎えられる利益に比較すれば）愚かなものに思えるであろうに。古来書き記されてきた多くの知識のうちから、特に7種のもので選び出されている。それら7種の知識とは、七自由学芸のことで、自由と称されるのは、それらの知識に身を委ねる人が、もはやそれ以上を望まなくても自由な心でいられるからだ。この七自由学芸には、望ましい教えが見出される。吝嗇な人は、自分の財貨を見たからといって、良い気持ちになれるわけではないが、七自由学芸に勤しむ人は、その知識だけで十分に幸せになれる。それらの学芸が自由と称される理由は、まだほかにもある。それに邁進する人は、心配から解放され、財貨も金の亡者にならぬ程度に獲得できるからである。言うまでもなく、過剰な財貨は学芸の教えを損なうものだ。第一の学芸は文法（Grammaticâ）、次の学芸は弁証法（Dialecticâ）、第三は修辞学（Rhetoricâ）と呼ばれている。これらの学芸のすぐ後に四つの学芸が控えている。算術（Arismetîcâ）、幾何学（Géometrie）、音楽（Musicâ）、天文学（Astronomie）がそれである。「文法」は、正しく話す方法を教える。「弁証法」は、真っ直ぐなものを曲がったものから区別する。つまり真実を誤謬から区別する。「修辞学」は、話に美しい色の衣を着せる。「算術」は、この知識によって数えられるようになるという報酬を与える。「幾何学」は、確実に測量することを教え、美しいメロディーをもつ「音楽」は、音響の知識を私達に与える。各学芸には、それぞれ秀でた人達がいる。「文法」の分野には、ドナートゥス（Dônâtus）とプリスキヤン（Priscjân）、更にアリストアルコス（Aristarchus）もいる。「弁証法」の分野には、アリストテレス（Aristôteles）、ボエチウ

ス (Bôêcjus)、ツェーノ (Zênô)、ポルフィリウス (Porphirjus) らがおり、「修辞学」の分野には、トゥリウス (Tulljus)、クインティリヤン (Quintiljân)、シドニウス (Sîdônjus) らがいる。「算術」の分野には、クリシッパス (Crisippus)、ピタゴラス (Pitâgoras)、「音楽」の分野には、ティモテウス (Timothêus)、ミレジウス (Millesjus)、「幾何学」の分野には、ターレス (Thâles)、ユークリッド (Euclýdes)、「天文学」の分野には、アルブマサル (Albumasar)、プトロメウス (Ptolomêus)、アトラス (Atlas) らがいる。これほどに賢い人達でさえも、自分の専門分野に熟知していると、確信をもって言える人は一人もいない。それなのに、宮廷作法に励まず狡猾な振る舞いにのみ励み、他人を騙すことばかり考えている人が、どうして賢明であると言えようか。ソロモン (Salomôn) でさえも、自分を非常に賢いと思ったことはない。それに対して、相手の腹を探るような用心深い話し方の他には何も知らない人が、自分を賢人だと勘違いして高貴な人を演じている。このような人は、長い間悪事に手を染めてきたのに、正しいことをしてきたかと思いたがる。これほど愚かになった人には、もはや何も言うことはない。この人は、一度も自分の村からでたことのない百姓のせがれと同様だ。長い間牢獄から出たことがなく、この世の大きさを知らない人にも例えられる。そしてまた、慣習に従って訴訟を起こす以外になんの知識も持たない人や、そもそも知識というものがいかに広く深く大きいかを知らず、自分の知識が完璧であると思い込んでいる人も同様である。

Der erkennt des sinns hœh tiefe breit
 der sich in dirre werlde beleit
 sô daz im niht enslift der vuoz
 und daz er hœhe stîgen muoz.
 der erkennet niht des sinnes wît,

weder hœh noch tiefe, der dâ lît
mit boesen werken zaller stunt
der hœhe verre in der helle grunt.⁹⁾

[足が滑らないように、そして自分を高めていかなねばならないように、この世で自分を導ける人は、分別の高さ、深さ、幅広さをよく知っている。いつも悪事に手を染めながら分別の高みから遠く離れ、地獄の底に寝そべるような人は、分別の幅広さも、高さも深さも知らぬ。]

しかるべく正しい生活をしている人は、「文法」をよくなしうる。「文法」をなしうる人が正しく話せなくても、彼は賢人である。嘘に対して自分を守ることができ、その結果人を騙すことがないなら、彼は「弁証法」を正しくなしうる。邪な策略を考えずに単一な色で自分の話に色付けできる人は、「修辞学」を完璧になしうる。行うべきことを過不足なく行える人は、「幾何学」をしかとなしうる。「算術」に通曉しようとする人は、昼夜を問わず力の限り、良いことを数限りなくこなすべきだ。言葉の響きを行いによって同じように素晴らしく響かせられるほどに、自分の生を誠実なものにできる人は、正しく「音楽」をなしうる。老年でも若年でも徳操の星で自分を飾る人は、「天文学」を十分になしうる。

正しく話せるから確かに文法のできる人だと言えるなら、正しく行える人はもっと文法ができるということになる。いつも誤りを見分けられる人が雄弁家であると言えるなら、いつも真実を語る人は、完璧な雄弁家だ。話を見事に色付けできる人が修辞家であると言えるなら、邪な策略を用いずに話を単色にできる人は、完全な修辞家ということになる。田畑を見事に計測できる人が幾何学者であるとするなら、自分の人生のために何を持つべきかを確実に知り、与えることも受け取ることもできる人の方が、いっそう幾何学者だ。いつも見事に計算する人が算術家であるとするなら、自分に備わる徳操

の群れを数えてもらえるほどの人の方が、更にいっそう算術家であると言える。音を見事に響かせる人が音楽家であるとするなら、心を込めて振舞うときのその心自体を響かせる人の方が、もっと音楽家だ。いつも星々を観察する人が天文学者であるとするなら、神を認識できる人は、もっと天文学者であると言える。神という星は、正義を明るく照らす太陽であり、私達にすべての光の喜びをもたらす。

IV.

上述の七自由学芸の他に、それらを超えている二つの大きな知識がある。それは「精神（神）についての学」（ディウィーニタス Divinitas）と「自然（肉体）についての学」（フィジカー Physicâ）であり、両者は七自由学芸の王であり命令者である。「フィジカー」は、病気にならないためには、どのように自分の肉体を守ればよいかを教えてくれる。更にこの学は、病気になったらどのような食事や薬が有効であるか、あるいは病人は何に対して身を守るべきかということも教えてくれる。「ディウィーニタス」は、罪に陥らないためにはどのように魂を守るべきか、あるいは罪に陥った場合、告解を受けるためにはどうすべきかを教えてくれる。肉体の面では、病気になって薬を探すよりも、むしろずっと健康を維持すべきだ。精神の面では、罪を犯した後には遅ればせに罪の絆から手を離そうとするよりも、罪を犯さぬよう自身を守るべきだ。目にゴミが入ったら、早速薬を用いるのが良い。ぐずぐずとして薬を用いなければ、肝心の目を失うことになる。それと同様に、魂の傷も早く手当てをするのが良い。神の代理人である司祭に、魂の傷を隠してはならぬ。犯した罪の告解をしないと、魂は救われない。病人はいつも、病気を引き起こすような食事を欲しがる。同様に罪人は、犯した罪を重くするようなものばかりを求める。

「フィジカー」によって、月の下にある一切のものの理を十分に知るべきである。他方、「ディウィーニタス」によって、天使と神を深く悟るべきだ。天の上に存するものについて私達に知識と技を授けてくれるのは、かつて七自由学芸の主人であった高貴なる「ディウィーニタス」である。しかし、月より下に存するものについて知識と技を授けてくれるのは、かの輝かしき「フィジカー」である。この学によって、四元素（地・水・火・風）を深く悟ることができる。しかし、天と月の間で運行しているものの理は、真の「天文学」によって理解される。それを理解しようとする時、「算術」と「幾何学」も大いに役立つ。前者は数によって、天と月の間の運行を算術的に計測し、後者は天の広間を幾何学的に測量する。

七自由学芸を支配する「ディウィーニタス」は、この世で人がどのようにして永遠の苦しみを追い払えるのか、どのようにして人がこれからずっと幸せに暮らしていけるのか、ということを教えてくれる。

von wanne kumt daz man deheine kunst
ze wizzen minner niht enwunscht
dan dise diu aller beste ist
an tiefem sinne und guotem list?
daz kumt dâ von daz si niht enmuot
wertlichen ruom und wertlich guot.¹⁰⁾

[深い思慮と良い知識の点で最善であるこの学ディウィーニタスよりも、他の学の方をもっと知りたいと思うのは、一体どこから来るのであろうか。それはディウィーニタスが、世俗の名声や世俗の財貨を求めないことから来るのだ。]

この学を学ぶ人は、世俗の分別や愛に熱中することがない。逆に、世俗のも

のに執着する人は、「ディウィーニタス」をすげなく拒絶する。

教会法（Decrète）と国法（Lêgês）に私達が耳を傾けるのは、それによって愚か者達をもっと賢明に愚弄するためである。教会法は正義の楯となるべきものだが、今の私達はそれを用いて、不正を正しいことだと思わせようとしている。教会法は、不正を行わせるために立法されたわけではないのに。この法のごとき立派な教えを歪曲したり、そうしようと虎視眈々と狙ったりする人は、後でひどく後悔することになる。歴代の皇帝は、賢明な助言を得ながら皇帝法（phaht）を作った。しかし、それは歪曲され易いので、毎日悪事が行われている。教会法も皇帝法も、不当な扱いをされなければともに立派な法である。なにはともあれ、教会法は神から届いた法なのだから。これら二つの法は、立派な目的のもとに作られたものだが、しかし今では両方ともその精神が踏み躪られ、儲けのために悪用されている¹⁰⁾。

V.

「ディウィーニタス」と「フィジカー」の学の方法と教えを、詩人は更に詳しく述べる。どのように後者が前者に従属するか。この話を聞けば、必ずや報酬として大きな知識を授かる。しかし、理解するだけの教養がない人にとっては、この話は無用の長物になる。俗人達が教育を受けた時代は、もうとっくの昔のことなので、俗人が到達できる理解目標を、低めに設定しなければならぬ。今は学ぶことに価値を置かないが、昔の子供らは皆、読書することが必須であった。その頃の生まれ貴き子供らは、皆学識を身に付けていた。今の子供のように敵意や憎悪を抱かず、自分の知識と学問に相応しい名誉を持っていた¹¹⁾。主君らも当然ながら十分な学識があり、尊敬されていた。ところが今では、主君らの多くは賢明な心を持たないので、賞賛を得ることは決してない。

アレクサンダー大王 (Alexander) は、この世の誰も比肩できないほどに、書物の学識が十分にあった。彼の師であったプトレマイオス (Ptolemêus) やネプタネーブス王 (Neptanêbus) も、十分な学識を備えていた。ソロモン王 (Salomôn) は、彼の王国のためというよりも、むしろ彼の学識の豊かさのために、世の人々に知られている。ダビデ王 (Dâvît) も広く世に知られているし、三人の賢王カスパル (Caspâr)、メルヒヨール (Melchjôr)、バルタザール (Balthasâr) も、行きたいところへ赴くことができるほどの確かな学識を備えている。ユリウス (Jûlius) も、完全な学識を身に付けていた。大軍勢を随えてローマ帝国を初めて蹂躪したこの人も、徳操に満ち満ちている。もし彼に分別と有能さがなかったとしたら、他の賢人や有能な人々は彼の支配に甘んじなかったであろう。

有能な主君や高貴な人々は賢人らに、自分の子供らを若いうちに教育してくれるよう依頼する。「何が悪くて、何が良いか」「何を喜んで育むべきか」「礼儀作法、名誉、善とは何か」「何に対して己の身を守るべきか」「何が正しくて、何が不正なのか」「何が曲がっていて、何が真っ直ぐなのか」「何が間違いで、何が真実なのか」このように重要なことを教えてもらうために、十分に学識を備えた家庭教師達を宮廷に雇う。そうすれば子供らは、適切な時期を逸することなく、良き教えを早めに受けることができる。これは子供らにとって、実に有益であり名誉でもある。なぜなら、人は知識から徳操を獲得するからだ。自分の愛する子供らを、どうやって裕福にしてやろうかと勤め励んでいる人々は、躰けと作法の点でも子供らの心を豊かにしてやるべきだ。教養ある心と同じほど大きくて立派な財産を、子供らに遺すことはできない。どのようにしたら神に好まれるかという問題を悟るのは、財貨によるのではなく、知識によるからだ。知識はまた、人がこの世でどのように生きるべきかということも、確実に教えてくれる。息子が高利貸しになったり吝嗇の収税吏になったりする原因となる財貨を遺してやるよりも、むしろ学

問・知識を伝えてやる方が、息子にとっても父親にとっても有益である。財貨は私達の心を先祖の方へ向けてはくれぬ。それとは反対に、分別は私達に先祖のことを思い出させてくれる。財産はその浮気な眼差しで私達をひどく惑わすので、その財産を遺してくれた父祖のことをすっかり忘れる。それゆえ、子供に財産を遺すより、むしろ聡明な心を遺してやる方が望ましい。

自分の子供を学校に行かせず、宮廷へも伺候させずに、節約と儲けのために子供を駄目にしてしまう親は、実は自分の利益を大きな損失に換えているのだ。子供に分別ではなく財貨を遺してやる親は、それによって子供がどうなるのかに気付いていない。怠惰ゆえに何もできず学ぼうともしない無知な人は、次のような言い訳で自己を正当化する。つまり、十分に学識のある人がなすべきことを何もしていないので、かえって学問のない人の行いの方が良いのだと。学識を備えた聖職者も学識のない俗人も、ともに悪事や罪を犯し儲けを企んでいる。このような状況をつぶさに見てきているので、学ぶ必要を全く感じない、と無知な人は主張する。その主張には、書物をよく読む人が即ち学識のある人だという、甚だしい思い違いが潜んでいる。聖職者達の中には、手当たり次第に書物を読んでも、理解できない者がたくさんいる。同様に百姓達の中にも、教会へ行って絵画や彫刻を見ても、その意味するところが分からない者がいる¹³⁾。

daz verstên ist niht gemeine.

wie wil du danne daz der baz

danne ein ander wizze waz

er tuon sol, der nihtes niht

kan verstên waz mein diu schrift.¹⁴⁾

〔(聖職者と百姓の) 理解は一樣ではない。聖書の伝えていることが全然分からない人の方が、そうではない人よりも、何をすべきかが良く分

かっていると、どうしてあなたは主張できるのか。]

学識を軽んじてはならないが、過大評価も避けねばならぬ。十分に学識を備えた医師が、健康を損なうような食事を取りたがり、自分の意地汚さに従って病気に苦しむことがよくある。聖書を十分に理解できるほどの学識がある人でも、ややもすると意地汚さに引きずられて苦しい思いをすることがある。そのようなこともあるが、しかし私達は学識を好むようにすべきだ。医師はたとえ病気になっても、自分で健康を回復できる薬を処方できる。学識のおかげで、わが身を助けることができる。人が穴に落ちた時、目が見えないよりも見える人の方が、その穴から出やすい。学識のある人でも罪をおかすことがあるが、神に背いていることを知って自ら告解にのぞむ。しかし、無知な人が罪を犯すと、神の命令について無知であるがゆえに、自分は絶対に神に背いていないと主張する。こうして無知な人は、一切の嘘が通用しない神を騙せると思うようになる。怠惰ゆえに無知である人は、神にも知られることがないので、当然のことながら神の祝福を受けることはできない。自分のせいで無知である人は、神のお慈悲に背く行為に走る。しかし正義は、知らないことを知るようにと命じている。知らないことを知ったら、最良の助言、神の助言に従うべきだ。良い助言を知ることのできる人は、完全な愚か者ではない。たとえば、ある人があなたから牛を奪うか、あるいはあなたの子供を殴るとする。その時、相手がその行為の正当性を主張し、その主張をあなたが理解できなければ、あなたは一大事とばかりに他の人の所へ行って、その主張の是非を教えてもらおうであろう。それなのに、もっと重要な魂のことに關しては、いっこうに教えてもらおうとしない。これこそが本当の愚かさなのだ。

神について大切なことを言おうとする人の言葉を、全く聴こうとしない人々がいる。神に救われず、悪魔に誘い込まれる人々だ。悪魔はひとたび捕らえ

た者に対しては、救済のための良い教訓を引き出せる話を聞かせないようにする。更に、神についての有益な話を、他愛もない冗談だと思わせる。それゆえ、神に心を向けようとする人、悪魔からさっさと離れて行こうとする人は、神の善意、神の拷問、神の謙譲について、すすんで聞かす。というのは、神について聞けば心に火が灯され、神に仕えようという気になるからだ。たとえば喉が渇いたとき、私の心が冷たい美味しい水の方に思いを致すなら、喉の渇きが私の心にすっかり火を点けて、そのことを気付かせてくれたのだ。謙虚になって神の裁きに耳を傾けるべきなのに、そうしようしない人は否応なしに裁きを受ける。神の裁きを誰も避けることはできない。神の命令を実行しない人を、神は受け入れようとはなさらぬ。神の言葉に耳を閉ざす人の願いを、当然ながら神は決して聞き届けようとはなさらぬ。人に神のことを説く場合、その人が聞くのを嫌がったり、聞いてもいっこうに改心しないなら、その人自身に無知があることを気付かせるべきである。俗人はよく次のような言い訳をする：「事の善悪を聖書で読み知っているはずの聖職者でさえも、悪事をはたらくことがあるのだから、俗人の私が神のお慈悲に背く行いをして、それは私自身のせいではない。なぜなら、主なる神が何を気に入る何を入らないのか、私には見通せないのだから。何と言っても私は聖書が分からないのだ。」これは全くの自己欺瞞である。聖職者の眼を通して入ってきても、聖書の内容は俗人の耳を擦り抜けていく。愚か者達は無知を口実に、なんと自分自身を欺くことか。

VI.

誰もが自身の中に五つの扉を持っている。視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚と呼ばれる五官である。この世で人が知ることは、いつもそれぞれの扉を通して入っていく。情報が入って来ると、「想像力」がそれを受容して、「理性」

のもとへ運ぶ。もし俗人が善良な心を持とうとするなら、ある扉から情報が入っていけなくても、別の扉から入っていく。相互扶助の関係が作られているからだ。聖書が何を言っているのか俗人に分からなければ、神の命令を実行しなくても神に対して責任がない、と言って彼の怠惰はしばしば彼を弁護してきたが、善良な心があればそのような弁護は不要である。善良な心を持たぬ俗人の耳の扉から、良い教えが擦り抜けていく。俗人がその扉を固く閉ざすなら、教えという特上客は入って来ない。

五官は外部で作用する。それに対して4つの力の支配力は、内部で作用する。五官は外部で働くことにより、かの4大力の下僕となって奉仕する。4大力は大きな正義を擁しており、自分達の王にあたる魂の助言者でもある。五官の中で、触覚がなくなれば誰も生きていられぬ。他の4つの官を失っても生きていけるが、触覚を失えば命にかかわる。従って、火傷や凍傷で触覚を傷めないよう留意すべきだ。詩人は神との触れ合いを求めて、触角を特別に重要視する。夜も昼も打つことによって触覚を目覚めさせ、悪臭によって嗅覚を、大きな威嚇によって聴覚を、苦い胆汁によって味覚を目覚めさせる。しかし視覚にとって、天の神の輝きに比すれば、昼もさほど明るくはない。闇と夜も視覚に与えられるから、目覚めさせることはた易くない。私達の五官は今、眠っている状態にある。触覚は、人が触れる柔らかなものによって眠り込む。聴覚は甘美な音によって、視覚は婦人の美しさによって、嗅覚は優しい吐息によって、味覚は甘さによって眠り込む。だが五官はいずれも、しかるべきやり方で目覚めさせてくれる主人を持たねばならぬ。その主人となるのが、「理性」「想像力」等である。五官は、眠っている今は主人に仕えることがない。

一般に主君らの正義は、邪な下僕らのせいで、たびたび疎かにされる。かの4大力の場合も同様で、五官が利益を求めるあまり優柔不断な態度をとるので、4大力は自らの正義を持つことができないでいる。しかし、下僕が

怠惰に身を任せるときには、主君が彼を殴りつけても当然だ。だから「理性」や「想像力」も、同じことをすべきである。五官が利益を求めて暴走することがないように、しかと嗜めなければならぬ。五官は財貨のために目詰まり状態であるから、私達の心の目は見えていない。その五官のせいで、「想像力」も「理性」も道を誤った。まさにこの状態が、魂の邪魔をしている。魂は、助言者である 4 大力を失ったので、もはやひどい助言しか得られない。本来なら魂は、4 大力に対して完全なる支配力を有している。良くも悪くもそれを用いて、様々な助言を得ながら実践するのだ。他方、肉体は正しいことも正しくないことも、魂の求める通りに行く。主人が下僕に対して悪いことを禁じなければ、下僕はしばしば悪事に走る。肉体についても同様であり、してはならないことを魂が肉体に禁止すれば、肉体は下僕と同じように悪事に走ることはない。

すべての人々の肉体は、墮地獄への準備をすっかり整えている。魂は徳操の群れと組んで、肉体と激しく戦うべきである。それなのに魂も、引きずり落とされるに任せている。魂はなすべきことを怠っているのであるから、当然その罰を受けるべきだ。

im lîbe solden haben meisterschaft
 diu sêle und die vier kraft
 die si ze râtgebinne hât,
 und volget doch des lîbes rât,
 wan der lîp und die vûmf sinne
 ziehent die sêle nâch gewinne.¹⁵⁾

[魂と、魂が助言者として持っている 4 つの力は、肉体の中に支配力をもつべきであろう。それなのに魂は、肉体の助言に従っている。なぜなら、肉体と五官は魂を、利益の方へと引っ張っていくからだ。]

五官はそれなりに支配力を持っているが、4 大力はその点では無力である。それなのに 4 大力は魂とともに、大きな名誉を授けられている。魂は常に肉体に対抗して、それを征服すべき立場にある。それなのに肉体に随うのだから、苦しみや悲しみを負って当然である。

VII.

魂はその立場が、国王に酷似している。国王が国を見事に統治できなければ、領民どもがたちまち悪事に走る。国王が怠惰に身を委ねるようなことがあれば、領民どもも苦しみを避けるようになる。魂が少しでも怠惰になれば、あるいは魂が肉体をしかるべく教え諭すことができないなら、肉体はその隙に乗じて神の慈悲に背く振る舞いをする。領民が良い暮らしをできない時は、王がその責任を取らねばならぬ。領民どもは自分の利益にならない場合、王の指導に従わない。肉体を十分に教え諭すことのできない魂にも、同じことが生ずる。肉体が邪悪なことや悪行に走る準備が整ったとき、魂は肉体に対して敢然とそれを阻止すべきなのだ。

なすべき義務を実行しなかった王は、自分に随う家来が負うよりも、もっと酷い結果を負うことになる。王は率先して悪事に手を染め、家来達よりも早く地獄の門に行き着く。魂についても同様である。肉体はひとたび死ぬと、最後の審判の日までその死以外の苦しみを被ることはない。肉体は自分が墓の中で朽ち果てる経過を知らないのだから。肉体にそうすることを許した魂は、肉体よりももっと早く不幸へと突き進む。最後の審判の日が来ると、魂と肉体は一緒にされる。この例で明らかなように、あまりにも怠惰をきめこんでなすべき義務を果たさなかった人は、だれもが地獄へ堕ちていかねばならぬ。罪の償いをしなければ、魂と肉体の双方が地獄へ堕ちる。これは決して避けることができない。肉体とともに魂にも、良いこと悪いことが起こる

のは当然だ。両者ともアダムとイブの時代から、正しいことを行ったり罪を犯したりしてきた。罪の償いをしない呪わしき人が、永遠に神の恩寵を失うことになるのは、決して不思議なことではない。死んでしまわなければ更に罪を重ねることを、彼の意志は防ぐことができない。それゆえ永遠の苦しみを味わうことになるのだ。地獄に堕ちた者はだれもが、地獄では死ぬことがない。この世の一切を創造された私達の主は、呪われた者達に死んでいるのと同じ状態で生き続けるよう、力なき力を与えておられる。永遠に苦しむようにと。これは神の至福にあずかれない大変な不幸として、彼らに与えられている。

怠惰ゆえの長い苦しみを短くするためには、また短期間のうちに賢くなるためには、誠実な心によって、しかるべく信仰と実践活動を等しく行なう他ない。そうすれば、神への道が平坦にされる。その道は、人を分別へと導くとともに、あらゆる種類の喜びの獲得へと導いてくれる。神ご自身のこと、神の力、そして天地に示す神の絶大な支配力に思いを致すなら、人はだれでもた易く信仰を持つことができる。体は小さいが大きな支配力を持つイエスに、神は無限の力を与え給うた。その結果イエスは、神のお知恵によって一切のものを征服した。イエスと姿は同じだが力を持たぬ人間の体内は、不思議なほどに脈管や骨で構成されている。しかし体内のどこにも余分な脈管がないほど、実に巧みに肉体は作られている。

daz diu sêl dar inne bestât
und doch ander natûre hât,
daz ist ein grôziu meisterschaft
die dar geleit hât gotes kraft.
Sît er an uns daz hât getân,
sone sol dehein werltlich man

des wunder hân, ob er an sich
 behalten hât vil wunderlich
 wunder unde vil seltsân.
 swer aver niht verstên kan
 daz man seit von sîner gotheit
 und ouch von der menscheit,
 der geloube mit einvalt
 diu gotes wunder manicvalt¹⁶⁾

〔魂は肉体の中にあるが、それとは別の性質を持っている。それは神の力が魂に与えた大きな支配力のことだ。神がそのようなことをして下さったからといって、神がご自身の中にとても不思議で靈妙な力を持っておられるのを、世の人々は不思議に思ってはならぬ。神の神性と人間性についても、話されることを理解できない人は、神の多様な奇蹟を素朴に信じるがよい。〕

VIII.

魂は肉体の中で、一体どのような奇蹟、支配力、技、力を持つことができるのであろうか。強靱さ、俊敏さ、巧みさは肉体の力であるが、もし魂が判断力に助けられて、これら3つに対する支配力をもつことができるのであれば、魂はしばしば大きな苦しみを被る。更に『第三の書』で述べられた6つのものを、魂は思慮分別に助けられて確実に統治しなければならぬ。魂はそのうえ、内に存する5つのものと、外に存する5つのものをも、すっかり支配すべきである。(内に存する5つのもの：強靱さ、俊敏さ、欲求、美しさ、巧みさ；外に存する5つのもの：高貴さ¹⁷⁾、権力、富、名声、支配)¹⁸⁾ これら10のものすべてを分別によって統御できない人は、決して人

と呼ばれてはならぬ。内にある5つのものを分別によって飾り整えようとしない人に、それらは多くの不徳をもたらす。外にある5つのものを分別の力によって統御できない人は、獣よりもその性が劣る。もし分別をもたない人が大きな財貨を獲得すれば、その人はすっかり思い上がりの心に支配される。しかし、獣が思い上がりの心を持つことはない。同様に、愛馬に黄金の馬具を作ってやっても、その馬がいっそう愚かになることはない。ところが愚かな人を金持ちにしてやると、その人はすぐに貴人を気取り、皇帝にさえなろうと思い上がる。犬がたくさん兎を狩るからと言って誉めそやしても、その犬は決して愚かにはならぬ。ところが愚か者を褒めると、もはや自分と肩を並べられる者はいないと言って思い上がる。兎はいつも変わらず敏捷であり、駱駝はいつも強靱で優しいのだが、決して思い上がることはない。しかし理解力が欠如した愚か者が、もし俊敏で強かったりすれば、激しい思い上がりのために、最後に倒れて死ぬまで自分の力を試そうとする。必要がないのに自分の力を試そうとする愚か者は、思い上がりのために必要以上に多くのことを望む。鳩は美しい鳥であるが、いつも変わらず優しくて思い上がることがない。しかし、もし男ないし女が清らかで美しい肢体をもっているなら、すぐに我慢ならぬほどに思い上がる。したがって、もし人が例の10のものを分別によって統御できなければ、その人は獣以下である。欲求を抑制しようとしらない人は、あまりにも獣に従っている。怠惰の点では驢馬に、不潔の点では豚に、意地汚さの点では犬に、怒りの点では鼯に倣う。

swer niht wil haben mannes sin,
 der sol von rehte hân den gwin
 daz er verre böeser ist
 danne ein vihe zaller vrist,
 wan ein vihe mac haben wol

âne sin daz ez haben sol.¹⁹⁾

「人としての分別を持つとうとしない人は、いつも獣よりずっと劣性であるという結果を当然得ることになる。なぜなら、獣は分別を持っていないのに、自分が持つべきものを確実に持っているのだから。」

判断力を待たない人は、例の 10 のものによって苦しめられる。それゆえ、それらを判断力の支配下に置くべきだ。どの人も分別と判断力を駆使して、かの 10 のものを統御しなければならない。魂の力が、どれほど卓越した力を持たねばならないかということに、だれもが留意すべきである。失敗の生をおくりたくなければ、自分の内と外にある 10 のものすべてを、確実に支配しなければならない。しかし、それらの他に 11 番目のもの、すなわち内にも外にもある「喋り」(rede) にも、大きな注意を向ける必要がある。それを制御できない人は、実に不幸な人である。内で確実に制御されるのでなければ、それは思いとは異なった出方をする。分別によって内で制御されるのでなければ、それは外で悪い結果を生み出す。私達が持っているものを分別によって糺すのでなければ、「喋り」は本来の価値をすっかり失ってしまう。

魂が肉体を支配するためには、まず四大力を支配し、しかる後に五官をも支配する必要がある。その際には、10 種の Güter (善きもの) が体の内でも外でも、不誠実や過大な財貨に走りがちなので、これも制御しなければならぬ。そのためには七自由学芸の知識や二大識、そして二大法も援用される。その時に最も大きな力となるのは「分別」と「判断力」であり、特に「分別」の重要性を、Thomasin はどこにおいても繰り返し説いている。

〈注〉

- 1) Heinrich Rückert/Friedrich Neumann (hrsg. v.): Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria, Berlin, 1965. 以下の詩行は、このテキストによる (WG と略す)。
- 2) 騎士の優れた性質を形容する語には、guot, reine, biderbe, vrum, lobesam, tiure, wert, triuwe などがあるが、明確な道德概念をも含める語には、stæte と mæze があり、Thomasin は特にこの stæte を好んで用いる。「もし stæte が欠けていれば、他の美德はすべて無に帰する」(WG 1819f.) とまで言う。
- 3) Thomasin の略歴とこの作品の構成に関しては、下記の書を参照：
Helmut de Boor/Richard Newald (hrsg. v.): Die höfische Literatur 1170-1250, in "Geschichte der deutschen Literatur", München, 1953, S. 403ff., 413ff.
Karl Langosch (hrsg. v.): Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon, Band 4, Berlin, 1953, Thomasin von Zerklære の項。
Burghart Wachinger (hrsg. v.): Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon, Berlin, 1995.: Thmasin von Zerklære の項。
- 4) Walther von der Vogelweide も [8, 28] の歌で、「川を泳ぐ魚、這うもの、飛ぶもの、地上を歩くもの」のように、酷似した表現をしている。両者とも、博物学者のアルベルトゥス・マグヌスが著書「動物記」で四分類した、「水中に住む動物」「地表を這う動物」「空を飛ぶ動物」「地上を歩く動物」と通底する。
- 5) Thomasin は、「今の世の中には、昔存在した器量豊かで立派な人がいなくなった」(WG 6281f.) と語り、道德墮落の責任を貴族、特に宮廷を所有する有力領主に帰している。「領主達のもとに伺候しているのは、もはや有能で賢明な人達ではなく、利得を貪る心よこしまな連中ばかり。宮廷を支配しているのは、正しい分別ではなくて、財だけである」(WG 6301ff.) と嘆く。
- 6) WG 8623-8628
- 7) Thomasin は、騎士の義務を『第六の書』と『第七の書』で扱っており、「哀れな男を打ち殺したり、その男から財を奪ったりするのは、騎士にあるまじき輩だ。何のために騎士になったのか、自分の使命をしかと思い返せ！」(WG 7765ff.) と檄を飛ばし、「騎士たる者は、もし自分の任務を果たすつもりなら、

夜も昼も教会や貧しい人々のために、全力を尽くす覚悟でいなければならぬ。しかし今日では、そのような立派な騎士がほとんどいない。この義務を果たさない者は百姓になるべきだ。そうすれば神の御心に背かないですむ。騎士でいるのに助力や忠告を惜しむ者は、騎士とは見なされない」(WG 7801ff.)と論ずる。

8) WG 8844-8852

9) WG 8991-8998

10) WG 9141-9146

11) Thomasin は、法がなければ秩序ある生活が成り立たないことを、強く意識していた。「ほかの何にもまして、法は万事の尺度であり、秤であり、数である。法なくしては、誰一人として平和に暮らすことはできない」(WG 12375ff.)

12) 詩人はここで、世俗の人々の教育が墮落していることを嘆いているが、現実の教育状況はまさにその逆であったようだ。世俗の人々の教育は衰退するどころか、むしろ 13 世紀は格段の進歩を示したし、貴族達一般の社会道徳も、悪化するよりはむしろ向上していったと考えられる。「宮廷詩人達が昔の方が良かったと賛美するのは、宮廷の完全性を求める新しい理想と、貴族社会の荒々しい現実との間の乖離を、鮮やかに浮かび上がらせるための手段であった。今の社会についての否定的な言葉には、アーサー王や円卓騎士達を自分達の模範とし、これらの人物がすでに備えていたと思われる宮廷的美徳を、いま自分達の実現しなければならないのだというアピールが込められていた」(Joachim Bumke: *Höfische Kultur*, Band 1., München, 1986, S. 28f.)

13) Thomasin は WG の『第一の書』で、絵画の高い教育価値を認めている。「百姓や子供らには、しばしば絵によって喜びが与えられる。賢い人は文字によって知ることができるが、それができない人は、絵画で満足すべきだ。聖職者は書物を読むべきだが、無教養で文字の読めない人は、絵を見るべきだ」(WG 1097-1106) この考え方は中世には広く認められており、その根拠として大グレゴールの次の言葉が推定される。「教会に絵画を置くのが望ましいわけは、文字の読めない人が書物から読み取ることのできない内容を、少なくとも壁に掛かる絵を見ることによって知ることができるからである」(Joachim Bumke: *ibid.* S. 443)

14) WG 9328-9332

15) WG 9579-9584

16) WG 9701-9714

17) 当時は一般に、生まれながらの貴族にはそれに相応しく、真の道徳性が具わっていないなければならないとされた。しかし、その思想が更に発展して、真の貴族性は家柄によってではなく、高潔な心ばえによって獲得されるものであると見なされることもあった。Thomasin は後者に属する。「全霊を真に善きものへと向けている人だけが高貴なのだ」(WG 3860ff.)

18) 高貴な血筋、名声、富などを「善きもの」とみなし、これらを美德に数え入れることを正当だと見なす根拠は、ローマ時代の道徳哲学の中に見出されるようだ。例えばキケロは、美しさ、高貴さ、強さ、権力、栄誉などを「有益なもの」という概念で捉えている (Joachim Bumke: ibid. S. 420)

19) WG 9809-9814